

第2回瀬戸市小中一貫校開校準備委員会会議録

▽日時：

令和元年11月18日（月）午後3時00分から午後4時10分まで

▽場所：

瀬戸市役所 4階 大会議室

▽出席者（順不同、敬称略）：

【瀬戸市小中一貫校開校準備委員会委員】

木村光伸、鈴木賢一、加藤高明、富永大輔、太田亜衣、加藤和守、矢野桂子、早川寿、臼井一夫、西原勇、加藤義人、井上勝太郎、近藤孝道、松原辰巳、古田孝、横山彰

【市】

教育部長 林敏彦、教育政策課長 松崎太郎、教育政策課主幹 原充弘、
学校教育課長 此下明雄、教育政策課専門員兼指導主事 深谷大輔 ほか

▽欠席者（敬称略）：

【瀬戸市小中一貫校開校準備委員会委員】

鈴木健二

▽議題等：

1 あいさつ

2 報告

(1) にじの丘学園の体制について

…資料番号 1-1～1-2

(2) 通学について

…資料番号 2

(3) にじの丘学園コミュニティ・スクールについて

…資料番号 3-1～3-2

3 その他

1) Q&Aについて

2) にじの丘だよりについて

3) 今後のスケジュールについて

▽議事内容：

1 あいさつ

委員長：本日は、今年度2回目の開校準備委員会である。7月に行われた第1回では、

開校準備校長の紹介や、通学路の安全対策・通学の支援策についてご報告いただいた。残すところあと4か月で開校となる。「瀬戸で学んでよかった」と、一人でも多くの子供が思えるような学校ができると確信している。そのために開校準備委員会も回を重ねて議論してきた。今日は、協議事項はなく、報告事項の中でにじの丘学園の体制についても報告があるようなので、開校準備委員会として子どもたちのために共有していきたい。協議事項がないからと言って課題がなくなったわけではない。まだまだ開校に向けて、また開校後もその課題と向き合っていかなければいけない。

○加藤高明委員、富永大輔委員よりあいさつがあった。

2 報告

(1) にじの丘学園の体制について

【資料番号1-1、1-2】に基づき、事務局から説明がなされた。

- にじの丘学園の学校規模について、現時点での児童生徒数を示した。最近でも学区への転入の問合せがあるので、開校まで数の変動が予想されるが、おおよその規模で子どもたちは学校生活を送ることになる。1、2、7年生は1クラス上限35人、その他の学年は1クラス上限40人である。よって、1、2年生は4クラス、3～7年生は3クラス、8・9年生は2クラスを想定し、準備を進めている。ただ、児童生徒数には特別に支援を要する児童生徒数を含むため、特別支援学級の設置を考慮すると、クラス数にも変動が予想される。
- 小中学校にそれぞれ校長及び教頭が配置される予定である。
- 資料下段は、1人の子供たちが各教科何時間授業を受けるのか示したものである。小学校は45分日課、中学校は50分日課である。
- 数字の後に「乗」とあるものは、小中一貫校の特色になるであろう乗り入れ授業を予定している授業である。たとえば6年生の算数は、中学校の数学専科の教員と6年生の担任と2人でのTTとなる。
- 8時25分を始業とし、資料1-2の日課のとおり子どもたちはにじの丘学園での生活を送ることになる。乗り入れ授業の関係もあり、なるべく授業のスタート時間を合わせて授業が実施できるようスケジュールを組んだが、全ての授業でスタート時間を合わせることはできないわけではないので、できる限り乗り入れ授業が実施しやすいよう調整をした結果である。
- 小中学校で授業の始まりや終わりの時間が異なるため、8時25分の始業の時間と、13時50分の授業開始の2回チャイムを鳴らす。それ以外はノーチャイム

で、子どもたちが時計を見て行動できるよう指導を行っていく。

委員長：乗り入れ授業に関して、中学校の専科の先生方への負担が大きくなるが、それを補う人員体制は出来上がっているか。

委員：非常勤講師を含め、持ちコマ数をカウントした上で、負担増とならない形で成り立つものと考えている。ただし、子供の数が変動することで学級数が増え、学級数が増えることで教員数も変動してくる。よって、現状の計算ではできる、といった回答になる。最終的な学級数及び教員数の確定までは、変動しうるということでご理解をいただきたい。

委員長：これは、にじの丘学園が開校すると決まった時からの課題である。新しい試みをするのに今まで通りの人員数で、というのは難しいものがある。学級数が変わると授業数もかなり変わってくるので、市教委の方からもしっかりと要望をしていっていただきたい。

副委員長：乗り入れ授業は国語や社会では行わないのか。

事務局：この規模の場合に、どの教科に専科教員が入ったり TT を行うのが効果的かということを経験した結果、ここに示した教科で乗り入れ授業を行うこととなった。これは開校当初の案であるので、教科、学年を含め、常に改善を図っていく。

委員長：総合的な学習の時間などになると、学年をまたいでの活動も起こりえる。校長先生のリーダーシップのもと臨機応変に対応して行ってほしい。

委員：5年生以降は英語が教科化されるので外国語活動という授業はないようだが、1～4年生が行う外国語活動は、具体的にどういった内容のものか。

事務局：外国語活動については外国語に親しむことを目標としている。一方で5年生から教科化される外国語は、達成基準がある。新指導要領では、3・4年生は外国語活動を、5年生から外国語を教科化することになっているが、本市では独自のカリキュラムを組み、1年生から外国語活動を行い、1～9年生で切れ目のない一貫教育を行う予定である。

(2) 通学について

【資料番号2】に基づき、事務局から説明がなされた。

○平成29年度に合同通学路点検を行い、学校ごとの想定する通学路の整備をしてきた。資料中、○が打ってある部分は今年度内に整備予定の箇所である。これ以外にも随時地区協議会やPTAからいただいた意見をもとに随時整備を行ってい

る。

- コミュニティ・スクール設置準備委員会でも、PTAの皆さんと協議しながら、見守りの体制を構築している最中である。
- 今回の資料は通学路の大きな幹を示したものであるが、これをもとに学校では詳細な通学路について、PTAの皆さんと協議をしながら決定をしていく過程にある。そこから通学班編成にも繋がっていくものである。
- 通学路の安全対策は開校後も続いていくものであるから、開校後も引き続きご協力をお願いしたい。

委員：今回この資料を見て、ここに至るまで大変な作業であっただろうなと感じた。庁内や他の関係機関とはどのような連携を取りながら実施してきたのか。

事務局：通学路についてはにじの丘学園だけでなく、全市的に3年に1度通学路の合同点検を行っているが、特ににじの丘学園は未知の通学路が多いため、平成29年度より準備をしてきた。その中でも警察には横断歩道の設置を、県には県道の整備を、維持管理課には市道の整備を、建設課には公園整備を、というように、新たな整備についてより連携を強固にし、整備を実施してきた。

委員：ラバーポールとポストコーンの違いは何か。

事務局：同じものと考えていただいて構いません。

委員：古瀬戸連区は、古瀬戸保育園の裏側の階段、木柵、防犯カメラの設置など整備をしていただいた。今後、それらの維持管理や点検はどこが担当することになるのか。

事務局：地域と連携しながら点検を行い、整備は教育委員会が担当する予定である。

委員：エスコートラインは白色のみとなるか。

事務局：今回は白色のみである。

委員：山道の階段の歩幅は、子どもが歩くのに適した幅になっているか。

事務局：基本的には、子どもが歩くのに無理のない幅で整備を行っている。

委員：東山小学校の山から学校へ向かう階段がちょうど今回の階段と似た環境にあるので、参考にさせていただけるかもしれない。

委員長：皆さんの心配は、教育委員会がきちんと現場を見て整備を行っているかどうかではないかと思う。

事務局：通学路担当の指導主事とともに、全ての通学路を歩き、確認の上、これらの整備を行っている。

委員長：保守管理についても、3年に1度の合同通学路点検の際にチェックしていくであろうものであるから、市教委も、作ってそのままにはしないはずである。とはいうものの、PTAを中心にそれらの箇所の点検は行っていかなければならないと考える。

(3) にじの丘学園コミュニティ・スクールについて

【資料番号3-1、3-2】に基づき、事務局から説明がなされた。

具体的な活動について早川開校準備校長より説明がなされた。

○まず必要となるのが子どもの安全な通学のための見守り活動であると考え、PTAと自治会が主に中心となって、見守り体制の構築を図っている。また、にじの丘学園の「なないろサポートステーション」はコミュニティ・スクールとしての活動を実際に調整していく部分であり、この「ななサポ」が核となり、サポーターを募集している。2月には登下校練習も予定しているので、そこまでを目標に見守り体制が整うよう、話し合いをしている。

委員：前回、この資料を見てから文科省の白書を読んで、数年前から「地域と共にある学校」という取組があり、コミュニティスクールや学校運営協議会という言葉が最近出てきたことを知った。次に8月にサポートセンター主催で開催された地域学校協働研修会でもとても勉強になった。その時、最後の質問者が「瀬戸はできていないから恥ずかしい」というようなことを言っていたが、自分はそうは思わなかった。瀬戸は昔からずいぶん地域と学校が協働している。広報せとの学校だよりのコーナーでも、それは紹介されている。実際にやっても、全体に理解してもらうということはなかなか難しいということを知った。たとえば水南地域では、学校の中に環境教育が入っており、見守り活動はもちろん、校外学習の付添も地域が行うし、公民館祭では小学校のお店が1つ出店される。なぜ水南でそれができているかというと、学校に地域と連携するための職務分掌が作成され、地域連携が先生たちの中に職務として位置づけられたからである。地域はいつも「何かやりたいな」と思っているが、地域側にも学校側にも調整する時にきちんとお互いのニーズを受け止める人が必要である。そうすればこの学校運営協議会も有効に作用すると思う。瀬戸の学校は既に地域協働をしているところが多いのだから、それをきちんと検証し、一度結果として学校へ返してみたい。

委員：三重県のとある小学校で、地域の方が学校の中に常駐している学校がある。そういった例を参考にすれば、にじの丘学園のコミュニティ・スクールもよりよい形で推進できるのではないかと思う。

委員：地域との窓口になる職員は絶対に必要だと考えている。また、地域の方々が集まれる物理的な空間も必要である。当初からこういったことは根底にあり、副委員長の方もお借りし、この2つのことは既に兼ね備えた状態で開校ができる。特にスペースについては、昇降口のすぐ右側に地域の方々が集まることのできる場所を設けている。あとは、そこに集まる一人一人の方のお力添えをいただけたらと思う。

委員：全国的には地域学校協働活動を行う学校・地域が増えつつある。愛知県内で先進的な学校では、やはり地域の方が常駐するスペースがあり、地域活動本部長や地域コーディネーターさんが多くの時間をそこで過ごしている。そして、常に学校連携職員と連携しながら授業のサポートをしていただいたり、放課や掃除の時間に子どもたちへの声掛けを行っていて、子どもたちもそれを受け入れている。にじの丘学園にもそういうスペースができるので、情報交換や雑談を通し、学校と地域との距離を縮め、地域の中にある学校としていつでも協力していただける体制を目指している。

委員長：この資料は全市的に向けて作られているチラシであると思うが、「ななサポ」の資料はにじの丘学園向けのチラシである。この資料を並べて見たとき、「ななサポ」がどの位置にあるものなのか一般市民にはわかりづらいと思うので、そこまで考えたチラシを作成した方がよい。
また、小学校と中学校それぞれに校長がいるとのことだが、コミュニティ・スクールは1つか。

委員：計画段階ではあるが、学校運営協議会はそれぞれにできる予定である。

委員長：教育目標は1つだが、サポートの形は2つということか。小中一貫校を作る趣旨と異なる気がするが、うまくやっていけるのか心配である。

委員：にじの丘学園が目指す教育目標は1つである、学校運営協議会はそれぞれにできるものの、それぞれに同じ教育目標のもと学校運営を行っていく。

委員長：地域学校協働本部となるなないろサポートステーションは1つなのか、2つなのか。

委員：1つの予定である。

委員長：学校運営協議会が2つで、地域学校協働本部が1つというのは違和感がある。PTAは1つか、2つか。

委員：それぞれで組織する予定である。

委員長：このチラシを見るとそんなことは読み取れない。それなら「それぞれに学校運営協議会とPTA組織を持つが、連携して行っていく」と記載しなければいけない。

委員：これからにじの丘学園はモデル校として模索しながら小中一貫教育やコミュニティ・スクールを推進していく。その成果と課題を、他の学区へも教えていただきたい。

教育長：現状小学校が5つ、中学校が2つあり、これをいかにうまく切りまとめていくかが課題である。今の段階では、小学校と中学校それぞれに学校運営協議会を持ち、それを束ねる地域学校協働本部1つを持って、まずスタートしたいと考えている。

3 その他

- 1) Q & Aについて
- 2) にじの丘だよりについて
- 3) 今後のスケジュールについて

○次回は未定

以上